

多様性の包摂に向けた 相談支援の取り組み

伊藤 駿（京都教育大学・NPO法人ROJE）
sito@kyokyo-u.ac.jp

発表の内容

1. 相談支援体制の概要（民間団体の取り組み・大学の取り組み）
2. 抱えている困難・特性の概要
3. 対応事例・結果
4. 多様性の包摂という観点からの提案

相談支援体制の概要

民間団体としての取り組み

R5～6 文科省委託事業
受託者：NPO法人ROJE



大学としての取り組み

R7～8 文科省委託事業
受託者：京都府教育庁
再委託先：京都教育大学

国立大学法人 京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

教育創造リサーチセンター機構
総合教育臨床センター
学びサポート室

無料 教育支援のご相談

「教育現場と研究知見をつなぐ、文科科学省委託事業」

特定分野に特異な才能のある
児童生徒への 相談支援

相談無料
京都府内対象
専門スタッフ対応

京都市関係者様限定
保護者さま向けの
相談支援を
ご希望の方へ

<https://manasapo-kyokyo.com/gifted/>



民間団体の取り組み



教育で未来をつくる
ROJE

「教育で未来をつくる」を行動理念として、
大学生と社会人が協働しながらあらゆる教育課題の解決に挑戦しています。

団体名称	NPO法人ROJE
正式名称	特定非営利活動法人日本教育再興連盟
団体設立	2005年10月
法人設立	2007年2月
代表理事	陰山英男、鈴木寛
所在地	【関東オフィス（本部）】 東京都渋谷区代々木5-62-1 【関西オフィス】 京都府京都市中京区竹屋町通烏丸東入清水町381 3階 【福島オフィス】 福島県南相馬市小高区本町1-87 【石川オフィス】 石川県金沢市円光寺2-7-2

民間団体の取り組み（保護者向け）

はじめての親の会の実施



第49回

spring

はじめての
親の会



これまで49回実施
参加者数：765名（実人数）
※アンケート回答者のみ

継続親の会の実施

継続親の会 年間予定表

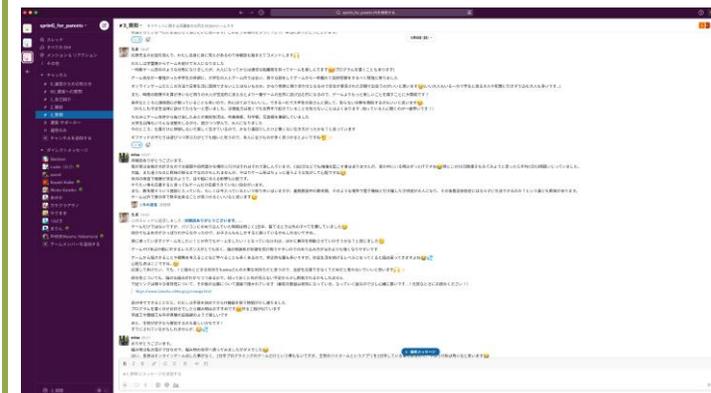
※全てのコンテンツは月額プランご利用時にはアーカイブ動画をご覧いただけます。
※内容は変更する可能性があります。

4月	5月	6月	7月
24 (木) 20時～21時半 児童精神科医：佐藤による 勉強会 「認知特性と薬の考え方 ドーパミンの話」	31 (土) 15時～16時半 保護者様同士の 交流会 ※小テーマあり	22 (日) 10時～11時半 児童精神科医：佐藤と考える 公開相談会 ※3名ほど事前募集	20 (日) 14時～15時半 高校生に聞いてみよう 当事者との交流会 高校生企画を予定
8月	9月	10月	11月
28 (木) 20時～21時半 児童精神科医：佐藤による 勉強会 「親子の不安に向き合う」	24 (水) 20時～21時半 児童精神科医：宮尾先生 による 勉強会	26 (日) 10時～11時 保護者様同士の 交流会 ※小テーマあり	27 (木) 20時～21時半 児童精神科医：佐藤と考える 公開質問会 ※チャットの質問にお答え します！
12月	1月	2月	3月
22 (月) 20時～21時半 児童精神科医：佐藤による 勉強会 「ストレスと身体症状の 関係」	26 (月) 20時～21時半 児童精神科医：佐藤による 勉強会 「こども、思春期の メンタルヘルスについて」	28 (土) 10時～11時半 児童精神科医：佐藤と考える 公開相談会 ※3名ほど事前募集	29 (日) 10時～11時半 佐藤・伊藤による 1年間の振り返りと 次年度活動計画 座談会形式

ROJE主催：NPO法人ROJE

毎月実施、毎回60名程度が参加

情報提供Slack



日々の疑問などを相互的に答える
参加者数：266名
医師や研究者も参加

民間団体の取り組み（教員向け）

教員向け勉強会の実施

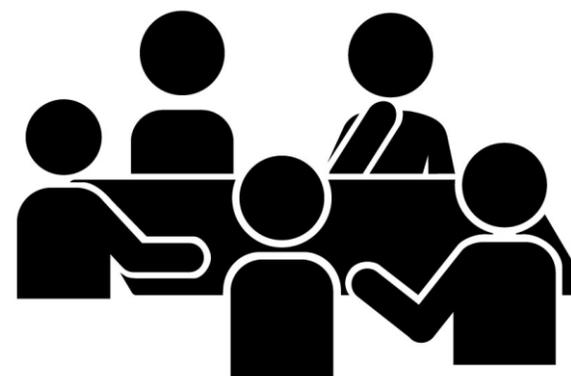
専門家登壇
教職員向け勉強会 2024年度年間予定表

ご関心に合わせて、程度でもご参加ください。
香開終了後30分、任意参加で交流会も開催します。

4月	5月	6月	7月
27[土]16:30-17:30 入門編 ～特定分野に特異な才能のある児童生徒の特徴と学校現場でできる支援～ 児童精神科医 佐藤謙一 京都教育大学講師 伊藤謙	11[土]14:00-15:00 学校で支援が必要な特異な才能児（ギフテッドを含む）と学校がそれぞれ抱える困難 千葉大学教員 石田裕代 京都教育大学講師 伊藤謙	16[日]9:00-10:00 日本における特異な才能のある児童生徒の理解と支援の事例 高知大学教授 長永か女子	20[土]14:00-15:00 特異な才能とワーキングメモリ 千葉大学教員 中道直人
3日[土]14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育①～認定と評価の基準～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 藤井真一	15[日]10:00-11:00 特異な才能のある子どもへの合理的配慮 北海道教育大学教授 片桐正敏	13[日]9:00-10:00 北欧の「ギフテッド」教育～教室で行われている工夫～ 高知大学教授 長永か女子	17[日]14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育②～ギフテッドプログラムの特徴～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 藤井真一
31日[土]15:00-16:00 特異な才能のある子のこころの発達をどう支援するか 児童精神科医 佐藤謙一	28日[土]10:00-11:00 事例からみるWISCの読み方と考え方 児童精神科医 佐藤謙一	お申込み・詳細 本会では詳細から申込みを随時いたします  https://syouchokakuho.jp/teaching/teacher/	主催 NPO法人日本教育内閣連盟 (ROJE)  本会では、文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の一環として実施いたします。
6日[金]16:30-17:30 ギフテッドを「診立てる」臨床的意義 JCHO船橋中央病院小児科医・千葉大学客員教授 杉田寛生	19日[水]16:40-17:00 子ども支援に向けた保護者との連携～質疑とメタディスカッションの観点から～ 京都教育大学講師 藤原久直		

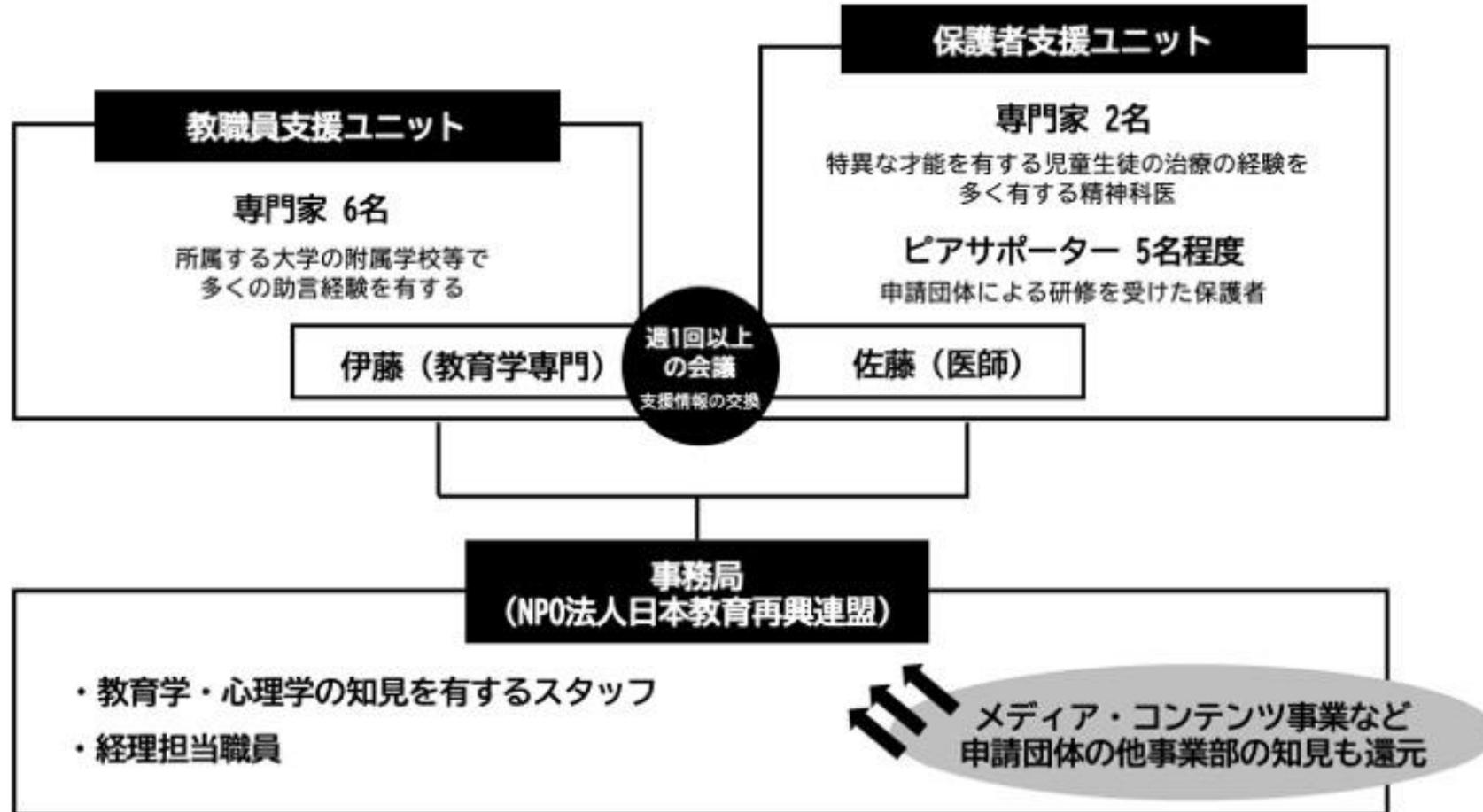
参加者数：178名
※アンケート回答者のみ

ケース会議の支援



不定期実施、5校で実施

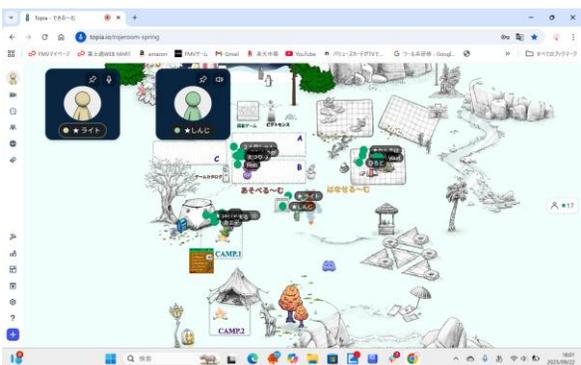
民間団体の取り組み



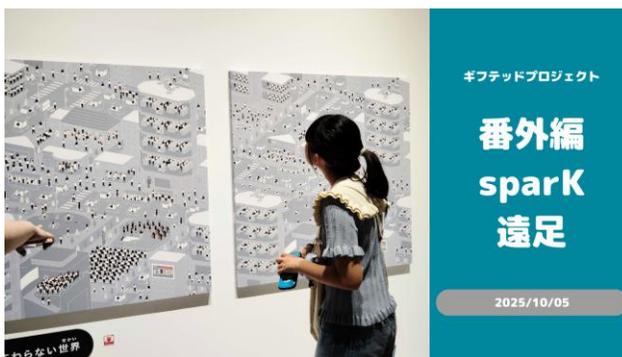
R5-6における相談支援体制

民間団体の取り組み（参考）

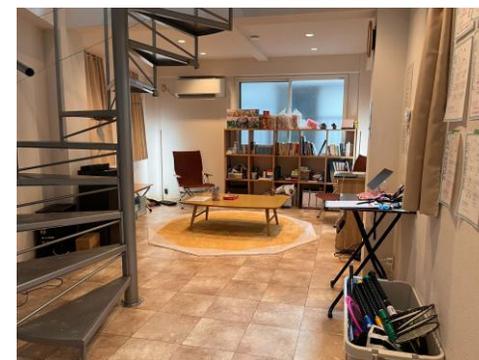
オンラインでの居場所支援



オフラインイベント



対面の居場所の運営



大学としての取り組み

About

[学びサポート室について](#)

[HOME](#) / [学びサポート室について](#)

多様な子どもたちの学びをサポートする 実践的支援方法の探求。

京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構総合教育臨床センター学びサポート室は、特別支援教育に携わる教職員の皆さまと関連する支援者の皆さまの実践をともに考えサポートするために、令和4年度に新しく開設されました。

附属学校園、地域の学校園、京都府・市の教育委員会や医療機関、福祉機関等と連携しながら、特別な配慮を要する幼児児童生徒への支援につながるよう教職員等への助言を行い、その知見を基とした実践的支援方法の確立と普及を図ってまいります。

大学としての取り組み



幼児児童生徒育成支援

学校全体の特別支援教育力の向上に向けて、それぞれの学校の風土に合った支援を開発、実践・研究しています。

附属学校園や公立学校園を巡回して幼児児童生徒の観察を行い、個別指導計画の作成や活用に関する助言や授業改善・児童生徒への対応についてのアドバイスをしています。また、研修を通してアセスメントの視点や効果的な支援への方略をサポートします。



他機関及び地域連携支援

乳幼児期、学齢期から社会参加に至るまでの各段階における多様な支援機関と学校の有機的な連携の推進や課題解決を行います。

保護者や様々な支援者（教師・心理士・社会福祉士・保健師など）が互いに支え合いながら子どもの支援ができるように、福祉・保健医療・心理などの多様な領域の支援機関と学校との有機的な連携関係の構築や発展を支援します。また保護者の心理への理解と支援を促進し、連携の要として支援者らとの関係性の構築を支援します。



キャリア発達支援

発達障害のある幼児児童生徒へのキャリア教育と教員への特別支援教育の研修・支援を、関係機関と連携して開発・実践しています。

子どもたち一人ひとりのキャリア発達を支えるために、現職教員と教員をめざす学生を対象とした「教職キャリア研修プログラム」を開発します。「はたらく」のみならず、ライフキャリアに焦点を当てた各学校でのキャリア教育実践や、学校・福祉・労働・保健医療等とのつながりの構築について、継続的にサポートしていきます。



知的ギフテッド教育支援

幼児児童生徒へのギフテッド教育の現状を調査し、知的ギフテッド児（特に2E児）の支援を開発・研究しています。

ギフテッド傾向のある子どもたち本人はもちろんのこと、保護者、教職員などへの相談、支援を行っています。日本においてギフテッドという言葉が注目を集めたのはここ数年のことで、他の3部門と比較しても社会における資源が非常に少ない状況です。そのため国内外の情報収集および既存の制度を活用した支援方策を考えることはもとより、必要な施策を積極的に発信しています。

京都府内のすべての学校の先生方



詳細はこちら

特定分野に特異な才能のある 幼児児童生徒への支援

ご相談ください



京都教育大学 学びサポート室では、「知的ギフテッド教育支援部門」を設け、2025年度から京都府教育庁より「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の再委託を受けています。

この事業では、特定の分野で優れた才能をもつ児童生徒が、安心して学校生活を送れるよう、保護者や教職員の方々を対象とした相談支援を行っています。ご希望に応じて、児童生徒に関するケース会議への参加や教育相談にも対応いたします。「ギフテッド」や「特定分野に特異な才能がある」といった正式な診断がなくても、ご相談いただけます。お話を伺った上で、必要に応じて他の機関をご案内することも可能です。

関心をお持ちの方は、どうぞお気軽にお問い合わせください。



教育の専門家はもちろん
学内外の医師や心理士も
協力しています。



学校からのお申し込みの
他、保護者からの申し込み
も受け付けています。



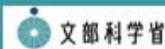
・子どもに関する相談
・教職員向け研修会 等…

子どもたちに向けた支援に
つながることに積極的に対
応します。

※丁寧にアセスメントを行うため、原則として保護者の方だけでなくお子様のご同意をお願いします。保護者のみの場合は連携する民間団体による親の会や相談会へお繋ぎいたします。詳しくは、裏面やホームページをご覧ください。

(お問い合わせ)

京都教育大学 総合教育臨床センター
TEL : 075-644-8354
Mail : manasapo@kyokyo-u.ac.jp



相談支援体制

このたび学びサポート室では、特定分野に特異な才能のある幼児児童生徒に関する相談支援事業を開始しました。特異な才能のある子どもたちの中には、数学や理科といった学習だけでなく、国語や芸術、体育などさまざまな領域で秀でた才能を有する人たちがいます。同時に、自分の得意を伸ばす機会が得られず、学校の集団生活になじめないことでもあります。発達障害と特異な才能の両方を有すると、その秀でた才能ゆえに支援の必要性に気づかれず、適切な支援につながらないこともあります。しかし未だ日本では、こうした子どもたちへの支援のシステムは十分に整っていません。そこで、京都府市内の子どもたちについて、本学の知的ギフテッド教育支援部門の担当教員を中心に、本人、保護者、学校からの相談にのり、発達特性のアセスメントや子育てのアドバイス、ケース会議等への参加や教職員向け研修などを行います。皆さまの気づきが相談への第一歩。ぜひご活用ください。



小谷 裕実
(京都教育大学学びサポート室長)



伊藤 駿 (京都教育大学学びサポート室講師)

知的ギフテッド教育支援部門担当の伊藤駿です。これまで600を超えるご家庭からの相談を伺ってきました。今回の文部科学省による事業のうち都道府県単位の相談支援の採択は京都府のみで、身が引き締まる想いです。特定分野に特異な才能のある児童生徒は、ついその才能に目がいきがちで、支援の必要性を理解してもらえないことが少なくありません。児童生徒本人や保護者・学校の皆さんのお話をしっかり伺い、少しでもできることをやっていければと思っておりますので、まずはお気軽にご相談ください。



田尻 智哉 (本事業に協力いただいている医師)

2020年 東京大学医学部卒業、組合立諏訪中央病院、東京大学医学部附属病院、地方独立行政法人栃木県立岡本台病院等で勤務し、現在は東京大学医学部附属病院助教。
精神科医として、子どもの心の健康や発達に関するご相談に取り組んでいます。これまで病院やクリニック、児童相談所や学校、発達支援の現場で、多様な困りごとに向き合ってきました。学校になじめなかつたり気になる行動がある特別な才能を持つお子さんへの支援など、お気軽にご相談ください。



NPO 法人 ROJE (本事業に協力いただいている団体)

2005年設立、設立以降、大学生やOBOGが中心となり教育支援活動を展開。2021年よりギフテッド傾向のある子どもたちへの支援を開始し、2023～2024年度に文部科学省による「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」に採択され、全国の教職員、保護者の相談支援を担当。現在は東京都渋谷区等で対面の居場所を開催しつつ、オンラインで子ども・保護者の支援を実施している。

大学としての取り組み

Step.01



ご連絡

お電話・専用フォーム・メール
でのお申し込み



Step.02



日程調整

受付スタッフより相談日程や方針のご案内を差し上げます。なお相談内容によってはお受けできないことや、本務の関係でお待ちいただく期間が長くなることもございます。



Step.03



ご相談

学校園からのご相談については、可能な限り学校での様子を伺えればと思いますので、学校園へ訪問してのご相談を予定しております。児童生徒の皆さま、保護者の皆さまにおかれましては、京都教育大学でのご相談が原則となりますが、ご事情に応じて在籍校等でのご相談も承ります。



Step.04



支援方策の策定

ご相談を踏まえ、その後の支援方策を検討いたします。支援の内容はご本人・保護者・学校園教職員の皆さまとご相談の上で決定していきます。



Step.05



支援内容の確認と 評価、改善

定期的に支援内容が適切であったかどうかを評価していきます。皆様に過度なご負担をお願いすることはございませんが、様子等をお伺いすることがございます。可能な限りご協力ください。

※2026年2月末時点（11ヶ月実施）で、保護者・本人からの発達相談170件、研修会40件（参加者数1,055名）実施。なお数は伊藤の他の室員が対応したものも含む。



大学内に相談室を6室、子どもが遊べるプレイルームを2室用意
※オンライン環境、電子カルテについても整備
※基本的に大学の既存環境を利用

大学としての取り組み



月1~2ヶ月に1回程度、同じような特性のある子どもたちが集まる場を設け、大学生スタッフと遊んだり交流したりしている。

同時に保護者は保護者同士の交流会（親の会）や大学教員による勉強会に参加できるようになっている。

また大学生の関わり方などをもとに、保護者自身が家庭での子どもの様子などを振り返る機会にもなっている。

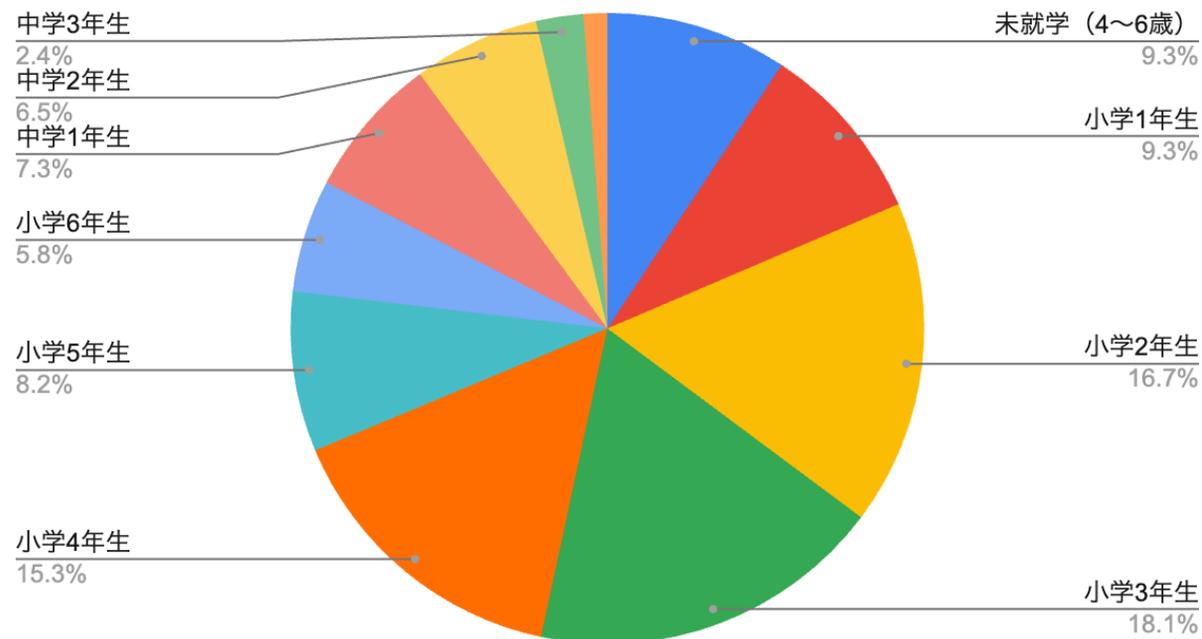
1回あたり15家庭ほどが参加。



抱えている困難や特性

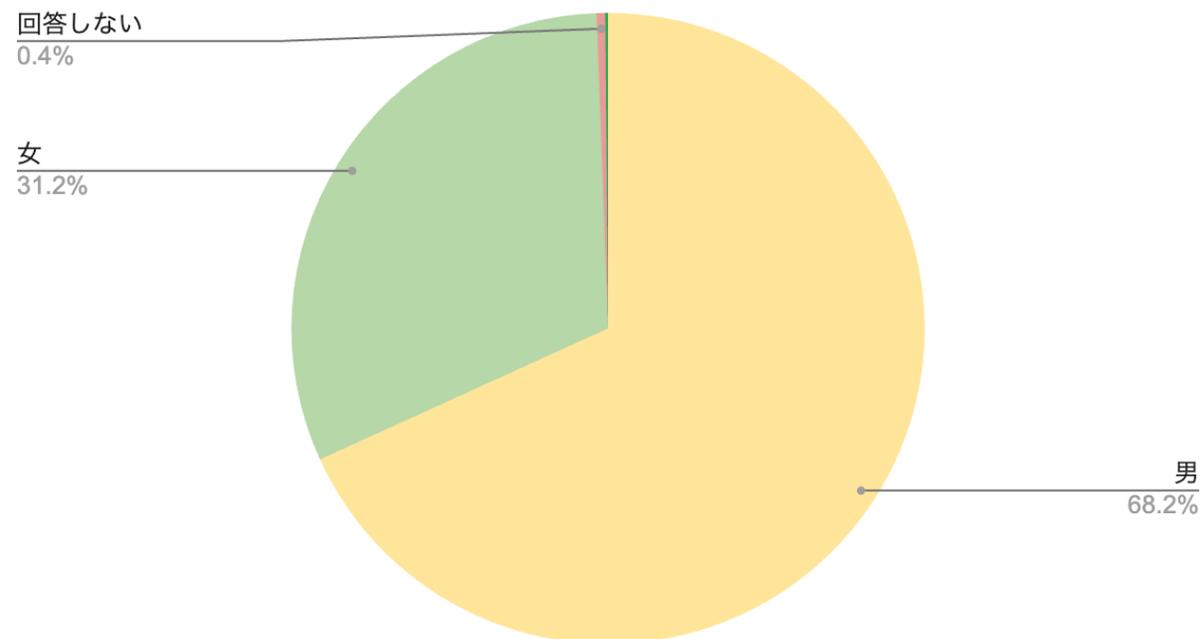
学年（お申し込み時）

n=748



性別

n=748

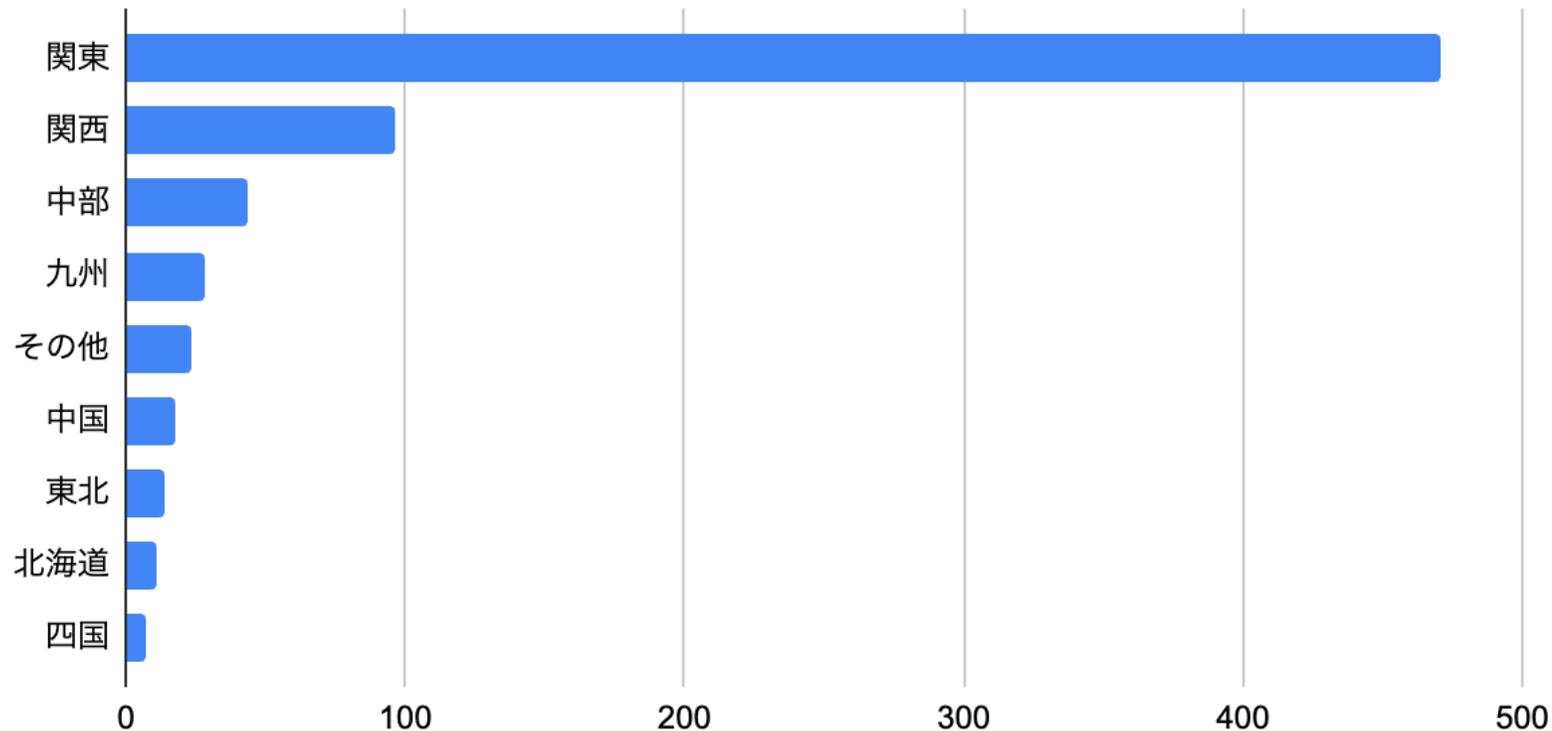


※NPO法人ROJEによる取り組みへの参加者

抱えている困難や特性

居住地

n=748



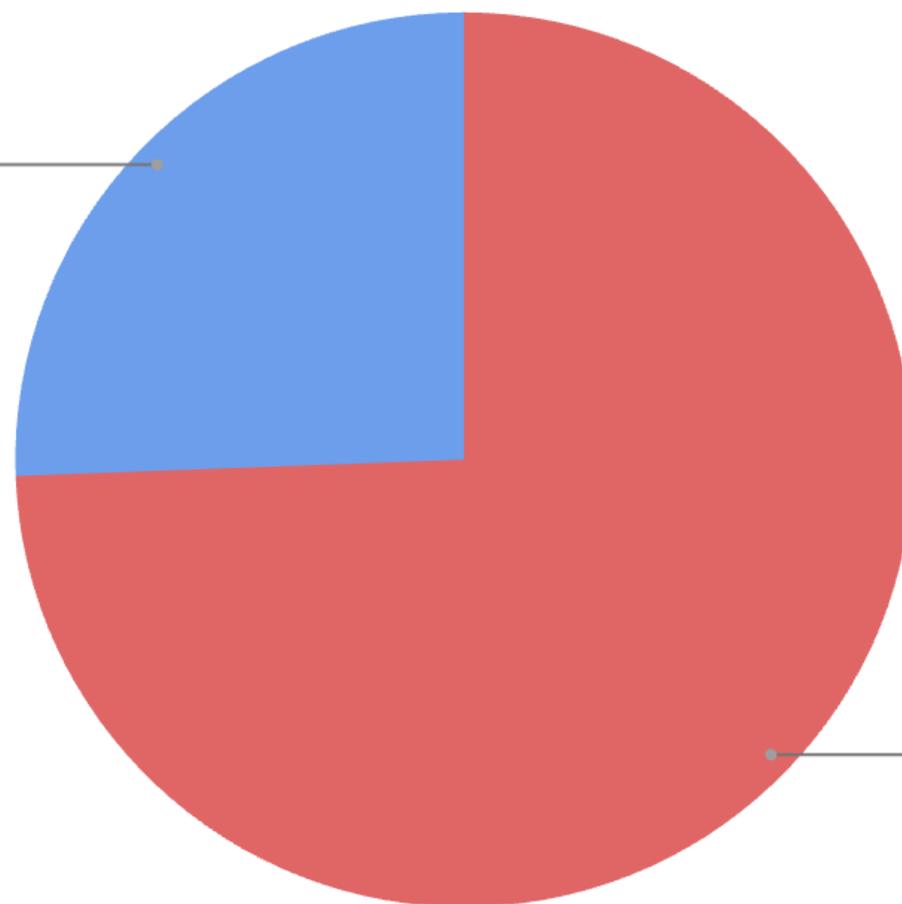
※その他は海外からの参加者

抱えている困難や特性

第三者からの指摘

n=748

いいえ
25.6%

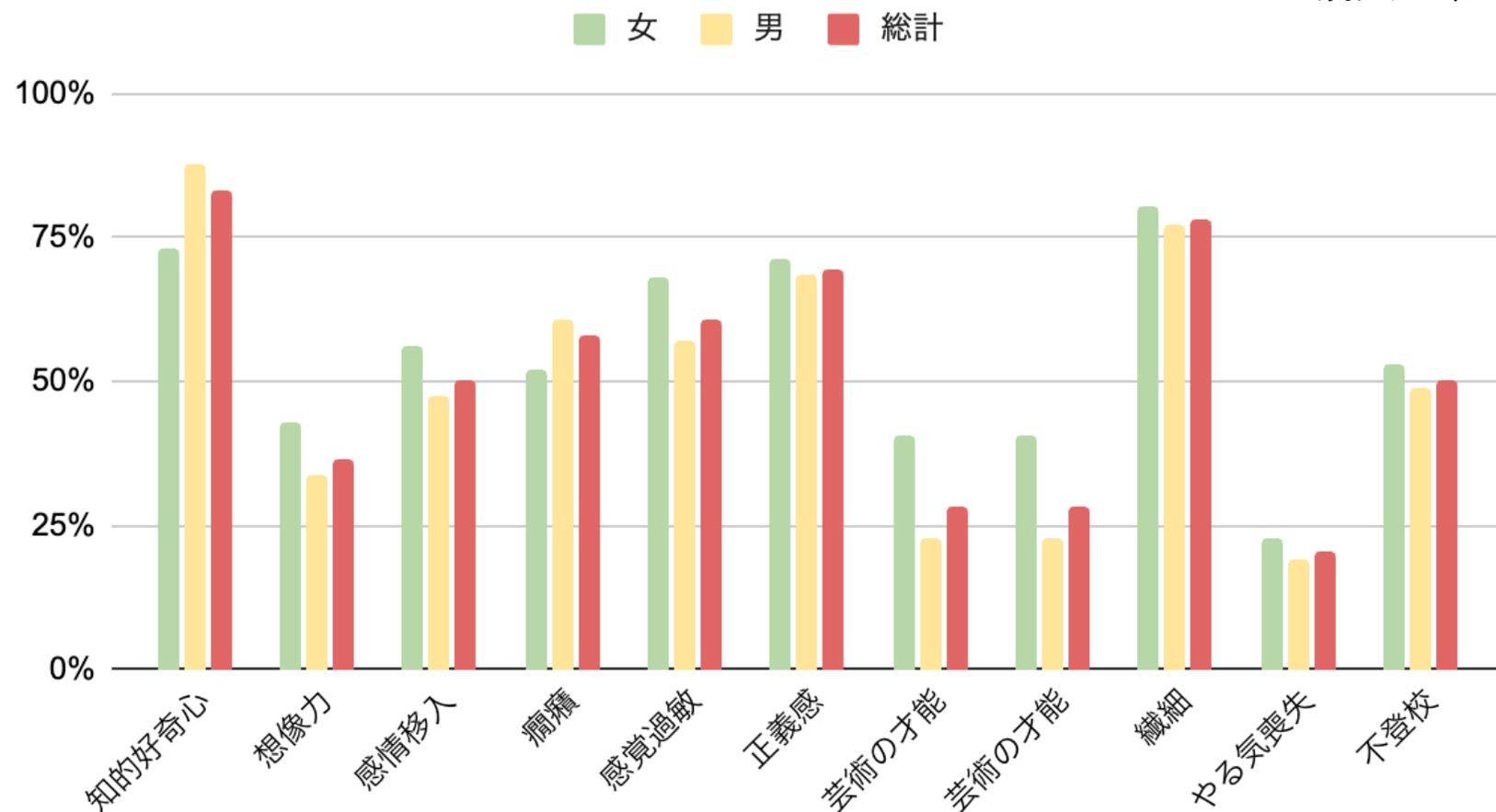


はい
74.4%

抱えている困難や特性

親の会アンケートから

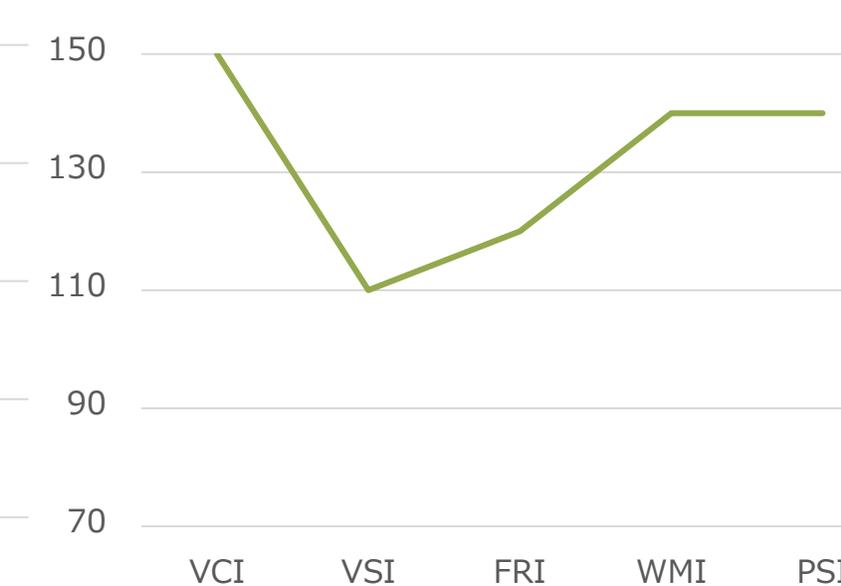
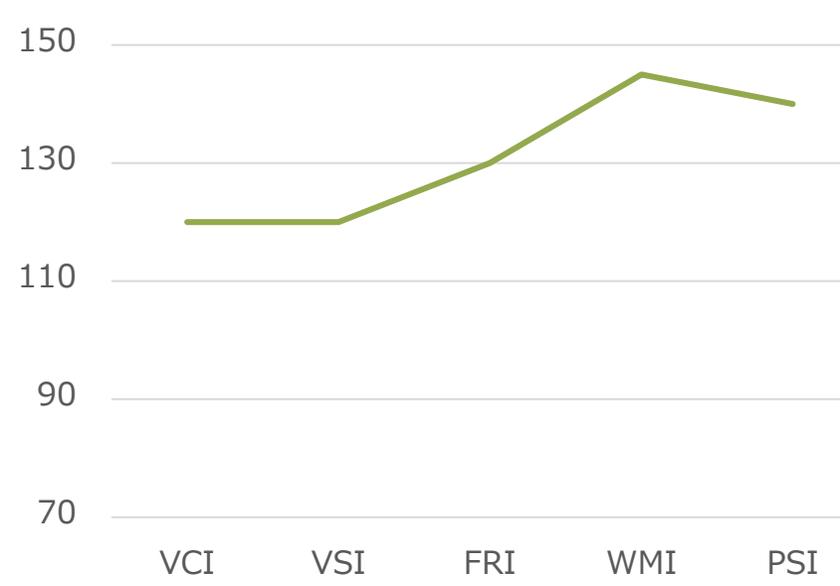
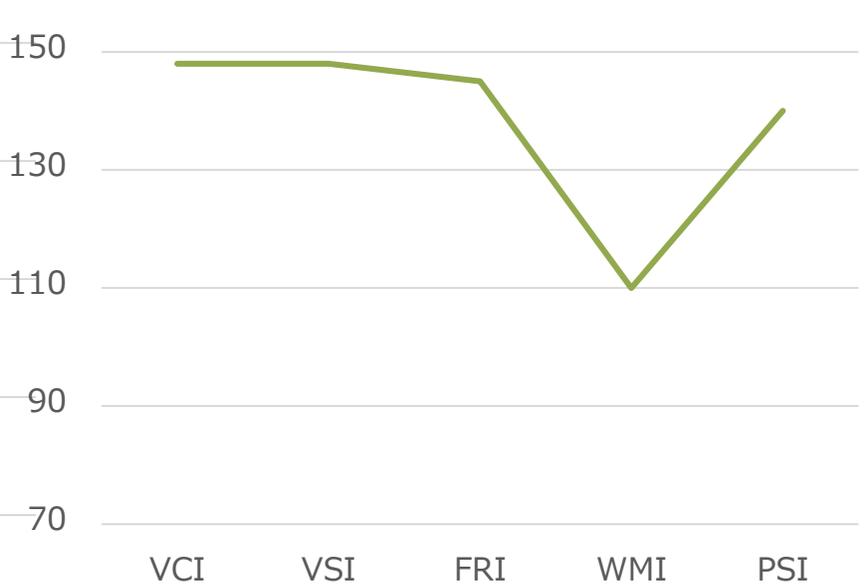
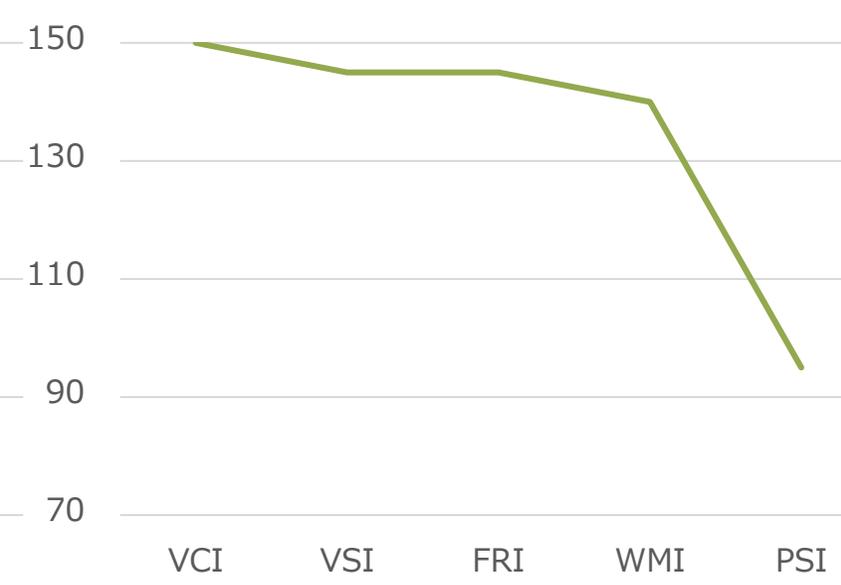
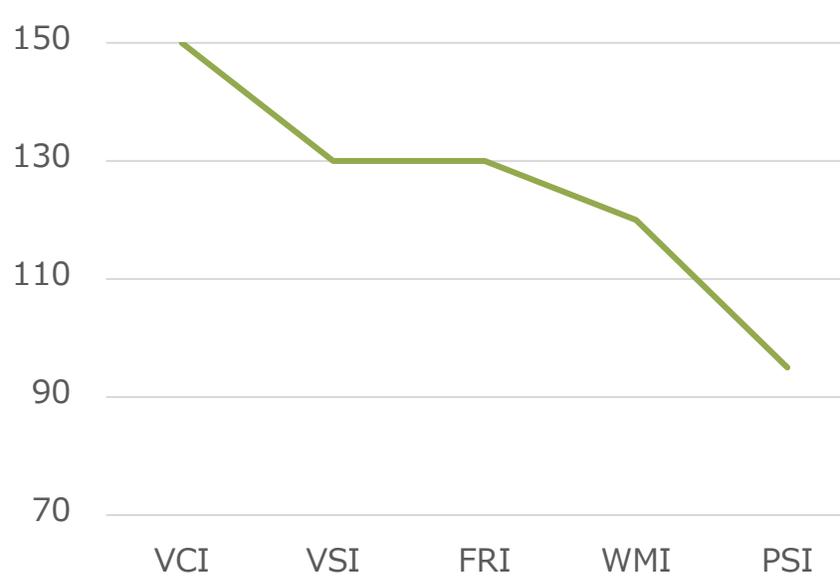
n=748
複数回答



その他

- ・ 家族以外の他者とのコミュニケーションに苦手を感じており、上手く付き合いたいが、自分には無理だと諦めてしまっている。
- ・ 完璧主義
- ・ 学校の授業がつまらない。

IQ130といっても・・・



対応事例（民間団体・ピアサポート）



お子さんの活動のメインフィールドを小学校から他に移した経験のある方のお話をお伺いできればと思っております。

我が家の小学校（公立）●年生の娘の現状は以下の通りです。

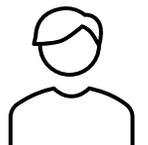
- ・1年生の秋からストレスによる心因性と思われる●●がみられる
- ・頭痛や腹痛もある
- ・五月雨登校
- ・勉強の成績は問題ない

■小学校に配慮いただいている内容

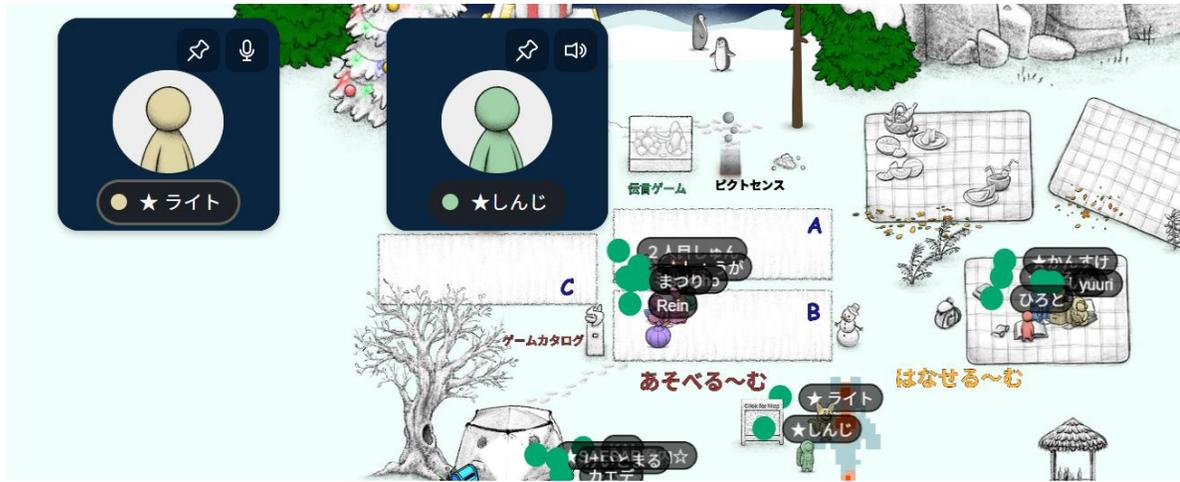
- ・別室の任意利用
- ・ノイズキャンセリングイヤホンの利用
- ・漢字書き取り宿題の免除

WISC-Vを受けたところ、全検査IQ:135、指標間のばらつきが70以上ある。

うちはフリースクールには通うのではなく、WISCを受け、学校と以下のように相談しました。当初学校には私立への転校を勧められるようなこともありましたが、こちらでいただいた情報をもとに相談をし、今は放課後登校で対応してもらっており……



対応事例（民間団体・異なる場からのフィードバック）



【ある日の報告】

皆でゲームをしました。

試合の途中で、Aさんが「負けそう、どうしよう」と言って弱気になっていました。そのとき、Bさんが「きみならできるさ」と歌って励ましていました。みんなから応援されて、Aさんも無理だと思いつつも最後まで頑張っていました。

また、Cさんは場を和ませようとしたのか、途中から面白い発言をしていて雰囲気を明るくしていました。

【保護者面談】

ある小学生の保護者との面談では、長く続いた不登校の経験の中で、いくつもの居場所を試しながら子どもが少しずつ回復してきた経過が語られました。現在は学校には給食の時間だけ通いながら、自分の調子の波を理解し始めている段階です。保護者は「教室に戻るかどうかよりも、安心していられる居場所が見つかること」を大切に考えており、学習の取り戻しと安心できる対話の場を求めて面談に来られました。

→現在大学生のメンターを活用し、毎週AIDリルの進捗管理と教科書の音読、雑談を楽しんでいます。

対応事例（民間団体・公開相談）



【質問（保護者）】

小5男子、2学期から完全不登校。少し気持ちが外に向いてきたので適応指導教室を検討中です。事前面談で息子の特性をどう伝えればいいでしょうか？担任に説明しても理解されず、うつ状態になった経験があります。知能検査の結果は見せた方がいいですか？

【回答（専門家）】

「ギフテッド」という言葉はそのまま使わず、知能検査の結果を見せながら「得意なこと・苦手なこと・困っていること」を具体的に伝えるのがおすすめです。高IQについては、相手が検査結果を見て気づいたタイミングで話す方が自然に受け止めてもらえます。適応指導教室は担任より理解ある方が多い印象なので、安心して相談してみてください。



【その後（保護者）】

アドバイスを参考に息子のことを説明したところ、親身な先生に当たり、息子に合わせて細やかに対応してもらえています。見学翌日から通い始め、1日1時間ほど外出できるようになりました。焦らずゆっくり前進できたと思います。

対応事例（大学）



ある日突然学校に行き渋るようになり、色々相談したり調べたりしていく中で、特異な才能のある子どもたちの特性とあてはまるように感じて問い合わせ。

病院等の順番待ちが長く相談ができていないことから、知能検査と連携している医師との医療相談(遠隔健康医療相談)も活用。高IQ(FSIQ130程度)の一方で生活スキルの低さが見られる。

保護者から学校に相談をし、学校から大学との連携のための申込が入る。

授業中の発言を無理に止めるのではなく、うまく活用する授業計画や社会生活スキルの低さを補うための通級等についても検討。

定期的（月1）に学校を訪問し、授業中の様子も見ていく。保護者は学校と大学が連携していることで安心感を得ている部分もある。

対応事例（大学）



日々の相談を受けていた養護教諭とSCがアセスメントを行う中で、特異な才能と困難さを併せ持っていることに気がつく。保護者に相談支援の仕組みを紹介し、保護者から大学に問い合わせ。

医療機関等への抵抗もあることから、専門家によるアセスメントを丁寧に行う。結果として知能検査で大きな凸凹が見られ、困難さを言語化して説明する。本人も納得感を得ている。

保護者も学校がつないでくれたという経緯もあり、学校で結果のフィードバックを行う。教員と保護者が話し合う機会にもなる。

結果として当該生徒については合理的配慮の対象であるとみなされ、専門家も入って配慮の内容を決定（感覚過敏や書字の困難へのアプローチ）。当該学年を飛び越えた学習にも許容。

みるみるうちに回復し（SC談）、継続的な支援については今のところ実施していない。

対応事例（大学）



市町単位の研修会で特異な才能のある児童生徒に関する情報提供を行う。また学校で参照できる資料も配布。

学校の中で話し合いをしている中で、資料にあてはまる児童がいるのではという話になり、教育委員会に問い合わせをして、大学に連絡がある。

学校からの問い合わせで、保護者の同意も得られたため、学校に訪問して、日々の様子や教員の見立てについて話を伺う。

観察の結果および学校で保管している情報を共有してケース会議を実施。学校でできる配慮についても検討。当該児童についてはICT（AIドリル）の積極的活用が効果的であると判断し、試行。ドリルについては大学が提供。

AIドリルの結果等を参照しつつ、定期的にコミュニケーションを続ける。

利用者の声（民間団体）



学習会があることで、我が子の理解を深めることができたのがよかった。保護者の雑談から、お子さんの個性や状況、環境を知れること。また共感し合えることや、専門の先生方のお話を聞けたり、質問に直接答えていただける機会があることがよかった。



特異な才能のある子どもへの支援に関心を示してくださらない教員に対しても、(R5-6で行っていた)教員向け講義の案内を渡すことで、文部科学省が関わる取り組みであることを知っていただくきっかけになりました。これにより、保護者や子どもの「怠慢」や「慢心」ではなく、実際に支援を必要とする特性の問題であるという理解につながる場面もありました。



現在は学びの多様化学校に通っていますが、本人に合った授業はなかなかおらず、他の同級生と認知力や関心事が異なることで、自己否定は助長され自信はなかなか育めません。だからこそメンター制度や居場所に救われているようです。

利用者の声（民間団体）

学習面というよりも生活面、情緒面での日常的な支援がほしいと思っております。



望むことは、もっと日本に特異な才能=天才児ではない、正しい認識が広まってくれること、困っている子が実際にこんなにいるのだという事を知ってもらう事なのではないかと思えます。



市が運営しているフリースクールや適応教室等の教員の方たちへの理解も広がれば、特異な才能の子どもたちの道も開かれると思います。不登校の子が通う場所の先生方には、理解や知識も持っていて欲しいなと思います。



そのような環境で新たな取り組みに前向きに勉強して対応しようという姿勢を持っていただいたとしても、先生方の働き方改革の流れもあり、どこまで相談して良いのか保護者としても迷うこともあります。また、高IQで過剰適応してしまう特に女子は、周囲には迷惑をかけることがないため、学校側は困っていないからと相談してもスルーされがちだなという実感があります。困難を主張していない子どもたちも裏では困っているということがわかってもらえるといいなと思っています。

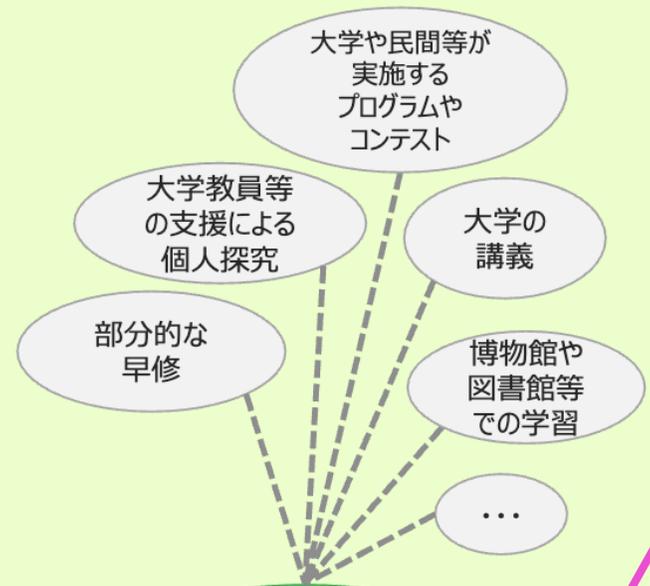




多様性の包摂という観点からの提案

特別の教育課程 ※1,2 (本WGでの検討事項)

- まずは、日常的な見取りや心理検査等により、一定の判断が可能と考えられる算数・数学や理科等の教科等に関わる認知的な側面に着目し、対象活動を学校内外で実施することを基本に据えてはどうか
- その上で、以下のいずれも満たす場合、対象活動の実施を可能とする方向で検討してはどうか (以下は対象活動の前提であり、対象児童生徒の考え方は別途検討)
 - ① 特例の適用に伴って、実施しないこととする相当教科等で育成する資質・能力について、おおむね適切に身に付けられると判断できる場合 (その際、個々の指導事項ベースで身に付いているかどうかを個別に確認するのは現実的に困難であることに留意)
 - ② 特異な才能のある児童生徒は、認知・発達特性等から、学习上・生活上の困難を抱えることがあることを踏まえ、以下の観点等から当該児童生徒に対して対象活動を実施する方が効果的であると総合的に判断できる場合
 - (1) 対象活動を実施することで、相当教科等の実施等に伴う学習上の困難の軽減・解消が期待できるかどうか
 - (2) 学級での他の児童生徒や教師との関係構築の観点から効果的かどうか (生活上の困難の軽減・解消の側面) 等
- その際、対象活動を実施する場合、以下のA、B、Cのパターンのように、相当教科等の一部または全部の内容及び授業時数を実施しないことができることとしてはどうか
 - A 総合的な学習の時間 (※3) の一部または全部
 - B 各教科の一部または全部
 - C 総合的な学習の時間・各教科の一部または全部



対象活動
(仮称)

イメージとしてこの点線を柔軟に、そして押し上げていく

この部分も相談支援機能が媒介可能では？

2階

教育課程

1階

通常の教育課程
(例)

通常の学級における
学習指導の工夫

生成AIを活用した
個に応じた指導

個に応じた高度な
課題の設定

「裁量的な時間」
の活用※

※対象活動と組み合わせて実施することも考えられる

連携

相談支援等 (関係機関と密接に連携しつつ、教育委員会が主体となることも想定)

教育課程外

[多様性の包摂という観点からの注意すべき論点]

- ・ 相談支援機能が通常の教育課程・教育環境からの押し出し機能になっていないか？
- ・ 都道府県・市区町村教育委員会の発達相談・地域支援機能などと連携できているか？
- ・ 今困っている児童生徒保護者に寄り添いつつ、中長期的視点を持っているか？

大前提は
1階の包摂性の拡張

社会モデルに立った変容の支援を

本人



知的好奇心にあふれ、授業中もよく発言する。

知識を持つあまり、いろんな友だちの間違いなどを指摘したりもする。年齢が進むと、徐々に話が合わないと感じることも。

×

環境



非同期発達によりできないことも多かったり、生意気を感じられてしまう発言をすることが多かったりして、大人からよく注意されてしまう。



話が合わなかったり、できていないことや叱られたことをからかわれてしまったりして、クラスメートの中で浮いてしまう。

困難さの理由は、本人の中にあるのではなく、本人と環境の間にある。

必要なことはなんら特別なことではないことは意外と多い（特に義務教育段階）
地域性を含んだ学校文化への理解とそれを踏まえた支援が必要。その際、教育委員会等と連携した地域の教員養成大学というインパクトは大きいと感じている。

相談支援体制から見えてくる三層支援

野口晃菜（2025年7月4日） 教育課程企画特別部会（第10回）資料をもとに作成

第3層支援
個に対する
アセスメントと指導・支援

2階がメイン

- ・通級・支援学級等を活用したSSTと才能伸長のベストミックスの検討
- ・今、特性ゆえに困っていることへのアセスメントと対応方策の検討
- ・明らかに学校段階を飛び越える高度な学習内容の提案
- ・2階シート（仮称）策定の支援

第2層支援
小集団に対する
+アルファの指導・支援

1階がメイン

- ・授業の一部や調整事業時数等を活用したAIドリル等の活用と支援（ログ解析など）
- ・教材教具等のバリエーションを増やす（情報提供）
- ・放課後や休みを活用した学習（仲間やロールモデルとの出会い）
- ・探究的な活動の幅を広げる（情報提供）

第1層支援
多様な子どもがいることを
前提とした授業・学級づくり

1階+2階共通事項

- ・高IQをはじめとする特異な才能等とされる子どもたちへの支援の必要性の認識の共有（研修や社会発信）：支援の対象外をつくらない体制
- ・子どもの声を丁寧に聞いていく：行動を伴うかはおいておいて、まずは話を聞く（聞くだけで変わることも多い。）
- ・特異な才能がある児童生徒であったとしても、多くの部分は他の児童生徒と同じもしくはむしろ苦手という実態を知った上での対応。

今困っている子どもがいる以上、2階の役割は大きい。ただそれまでにできることもある。

